

特集 子どもの現在

子どもの現実

― 超少子社会を生きる男女の自立への道を拓き開くために ―

馬 居 政 幸

一 コロナで子どもが生まれえない？

「少子化、コロナで加速 昨年度出生数4・7%減、婚姻・出産控え響く」（二〇二一年五月二十六日 日本経済新聞朝刊）
 一面トップの見出しである。五面に「出生減、潜在成長率に影 0・1～0・2ポイント押し下げの見方も」との解説も掲載される。厚生労働省が前日発表した「人口動態統計速報（令和三年三月分）」による報道だが、4・7や1・10・2との数値で問題を宣揚する見出しに違和感を持った。

数値化は、出生数減に関わる多様な人々の営みを隠し、変化する事象の具体像への問いの除去により、出生数減加速（社会事象）を、読者（自分）とは関わりのない別の世界の出来事（他人事）に位置づけ、日常の現実の外に出す。今（少子社会）を生きる全ての人が、出生の数と率を下げる加害者被害の当事者となりうる事実と向き合う（対峙する）貴重な機縁（情報）

であるにもかかわらず。コロナは少子化の加速ではなく、隠された問題（事実）を顕在化させただけなのに。
 その証左（エビデンス）を、大戦後のベビーブーマー（団塊）からコロナ禍（超少子）までの出生数、死亡数、出生率の推移を五種（団塊、少産、ジュニア、少子、超少子）の世代（人口コホート）の生起で問う図1を用意した。

二 五つの世代が織りなす同時代性の虚実

「多様な人の営み」のエビデンスは、出生数の二つの山（団塊とジュニア）と谷（少産と少子）の形状に求められる。特に一つ目の山の山頂の高さ（団塊誕生 山頂一九四九年、出生数二七〇万人、出生率4・32）と、わずか十年（一九五〇～六〇年）で実現した出生数四割減と出生率半減超による谷の深さ（少産誕生 谷底一九六〇年、出生数一六一万人、出生率2・0）に注目してほしい。この減少幅の大きさと時間の短さこそ、

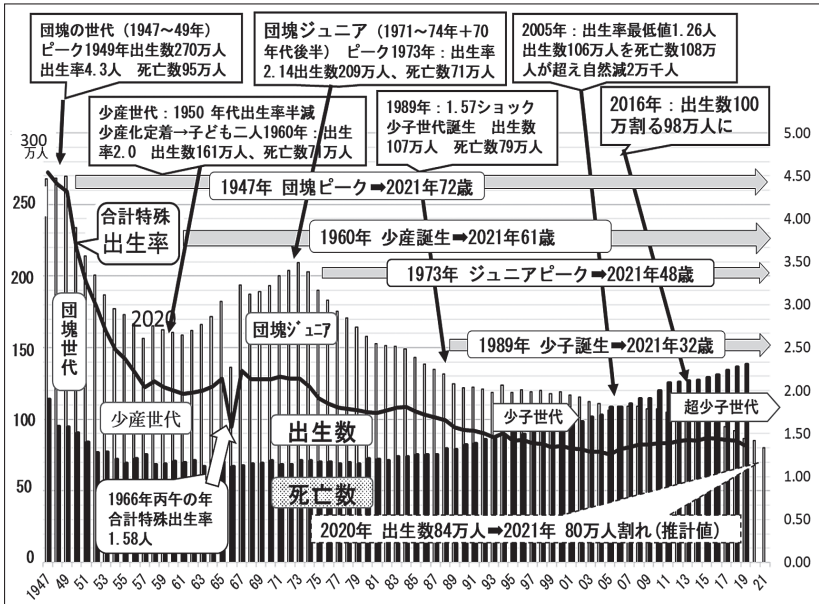


図1 出生数、出生率、死亡数の推移と世代形成の特性
 図1の出生率は全て合計特殊出生率（一人の女性が生涯に生む子ども数の平均値）

一九九〇年以降の終わりになき出生数減と高齢者激増による人口減少社会への移行の淵源だからである。

通常、人口減少は流入者より流出者が多くなる社会減と出生数より死亡数が多くなる自然減に分けられる。だが戦後日本の政府と社会が解決を迫られたのは出生数の制限（家族計画）による貧困の克服（社会政策）だった。その標語（警句？）が「貧乏人の子沢山」から「少なく産んで、よく育てる」だが、この原則は二つ目の山（団塊ジュニア誕生 山頂一九七三年 出生数二〇九万人、出生率2・14）も共有する。改めて図1を見てほしい。ジュニア出生数の棒グラフの山頂からの稜線は緩く長い。出生率の折れ線グラフは低角度で降下する。高度成長期と重なる二つ目の山の形状は谷ではなく宅地開発可能な裾野。サラリーマンと専業主婦と二人の子ども（戦後家族≠日本版近代家族≠団塊ニューファミリー）が生活する都市近郊の団地（2DK）での日常が想起される（虚）。だが、その光景は一九八九年の一・五七ショック（実）で揺らぎ始める。それまでの出生率最低値1・58より低くなったことが原因だが、少子化、合計特殊出生率、人口置換水準などの言葉や数値とともに人口減少への関心が高まる。しかし出生率低下は止まらず。その結果、二〇〇五年に最低値1・26を記録し、この年、死亡数一〇八万人が出生数一〇六万人を超えて、人口減少時代への移行が確認された。

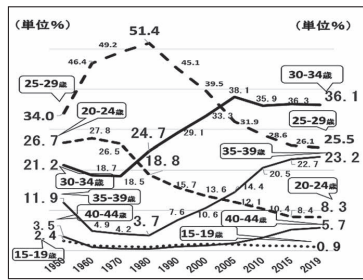


図5 女性の年齢（5歳階級）別出生数の割合：1950～2019年

年次	児童のいる世帯	児童1人	児童2人	児童3人以上	児童のいない世帯
1975	53.0	20.0	24.6	8.4	47.0
1986	46.2	16.3	22.3	7.7	53.8
1989	41.7	15.5	19.3	6.8	58.3
1992	36.4	14.0	16.3	6.2	63.6
1995	33.3	13.5	14.4	5.5	66.7
1998	30.2	12.6	12.8	4.9	69.8
2001	28.8	12.2	12.2	4.3	71.2
2004	27.9	11.9	12.2	3.8	72.1
2010	25.3	11.3	10.7	3.3	74.7
2015	23.5	10.9	9.5	3.1	76.5
2019	21.7	10.1	8.7	2.8	78.3

図2 児童の有（児童数）無の世帯数推移

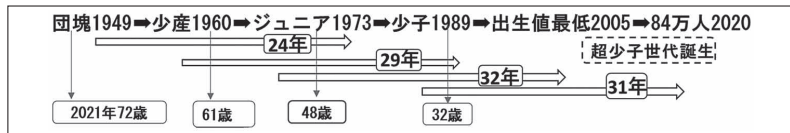


図4 5種の世代間の関係を示す年齢幅一覧

表1 世代別の出生率（普通、合計特殊）、出生数の年代別実数一覧

	1949	1960	1973
※普通出生率	33.0	17.2	19.4
合計特殊出生率	4.32	2	2.14
出生数	270万	161万	209万
	2005	2015	★2020
普通出生率	8.4	8	6.8
合計特殊出生率	1.26	1.45	1.34
出生数	106万	101万	84万

	正規職	非正規職	その他	仕事なし(単位%)
2004	16.9	26.2	13.6	43.3
2010	16.9	31.2	12.1	39.8
2015	22.4	37.2	8.4	31.9
2019	26.2	37.8	8.5	27.6

図6 末子の母の仕事の状況の年次推移



図3 出生率低下に伴う家族・近隣の変化のモデル図

表1・図3：★ 概数

その後、出生率は若干増加（虚）したが出生数減は続き（実）、二〇一六年に一〇〇万人を割って九八万人に（超少子世代の誕生）。コロナ禍の二〇二〇年は八四万人（実）、二一年は八〇万を割ると推計（虚？）される。他方、二〇二一年度に団塊最年長は七十四歳、少産は六十一歳、ジュニアは四十八歳、少子は三十二歳。いずれも超少子世代と同時代を生きるが、人口減少社会を創った（創られた）当事（加害・被害）者でもある。この事実から子どもたちの現実を問い直す作業に入りたい。

三 出生の数と率の減少が負荷する子どもの現実

子どもの現実を直截に示すデータとして、二〇一九年国民生活基礎調査（厚労省）から「児童の有（児童数）無の年次推移」を取り出し（図2）、「児童のいる世帯」に注目する。

ジュニア誕生期の一九七五年は「一人」「二人」「三人以上」あわせて53.0％と全世帯の五割を超えていた。それが一・五七シヨック一九八九年では11.4ポイント減の41.6％、出生率最低値1.26の前年二〇〇四年は27.9％で三割以下に。そして直近の二〇一九年は21.7％、全世帯の二割にまで減少した。団塊から少産への出生数の減少と異なり、ジュニアから少子化では「児童のいる世帯」が激減するのはなぜか。世代間等比較図（図3・4・5・6）と数値（表1・2）によって答えたい。

まず図3上段は団塊。図示するように兄弟姉妹四人以上を意

味する合計特殊出生率（以下本節出生率A）は4.3だが、人口千人当たりの出生数の普通出生率（以下本節出生率B）は33.0（計算上では三年続くと〇、一、二歳までの乳幼児が人口の一割超）である。その結果、団塊男女の多くは、家の内と外の双方で、年長の男女による理不尽を厭わぬ鍛えを愛情とみなす日常を強いられた。

中段は少産とジュニア。前節図1に記したように、両親世代の出生数は異なるが出生率Aの2.0と2.1（母が生む子ども二人）では差がない。図示するように、どの家にも子どもがいるのは団塊と同じだが兄弟姉妹は半減の二人、長男長女が多数派に。その結果、同年齢の友はいるが異年齢との日常の縁は失われる。

下段は少子と超少子。図2と表1に示すように、一九八九年1.57から二〇〇五年1.26までの多数派は「児童二人」。その意味で、同じ二人つ子の少産・ジュニアとの違いは何か。晩婚化＋非婚化による未婚者の増加（出産女性減↓子どものいる世帯減）が出生率低下の原因であること。しかも、二〇一五年に出生率Aが上昇に転ずるも、出生率Bと出生数は減り続けて一人つ子が多数派に。さらに二〇一六年から再び出生率Aが減少に転じ、二〇二〇年（概数だが）出生率Aが1.34、出生率Bが6.8、出生数が八四万人に減少する。この過程を図4で確認すると、多数派のジュニアが四十代後半、少数派の少子

味する合計特殊出生率（以下本節出生率A）は4.3だが、人口千人当たりの出生数の普通出生率（以下本節出生率B）は33.0（計算上では三年続くと〇、一、二歳までの乳幼児が人口の一割超）である。その結果、団塊男女の多くは、家の内と外の双方で、年長の男女による理不尽を厭わぬ鍛えを愛情とみなす日常を強いられた。

中段は少産とジュニア。前節図1に記したように、両親世代の出生数は異なるが出生率Aの2.0と2.1（母が生む子ども二人）では差がない。図示するように、どの家にも子どもがいるのは団塊と同じだが兄弟姉妹は半減の二人、長男長女が多数派に。その結果、同年齢の友はいるが異年齢との日常の縁は失われる。

下段は少子と超少子。図2と表1に示すように、一九八九年1.57から二〇〇五年1.26までの多数派は「児童二人」。その意味で、同じ二人つ子の少産・ジュニアとの違いは何か。晩婚化＋非婚化による未婚者の増加（出産女性減↓子どものいる世帯減）が出生率低下の原因であること。しかも、二〇一五年に出生率Aが上昇に転ずるも、出生率Bと出生数は減り続けて一人つ子が多数派に。さらに二〇一六年から再び出生率Aが減少に転じ、二〇二〇年（概数だが）出生率Aが1.34、出生率Bが6.8、出生数が八四万人に減少する。この過程を図4で確認すると、多数派のジュニアが四十代後半、少数派の少子

が三十代前半になり、出生数の分母が二重に縮小する。これが図2で確認した「児童のいない世帯」八割の背景である。

たとえ今後、出生率が上昇しても、歯止めのない分母の縮小によって、親子共に育ち、育て、学び合う仲間とモデルを日常生活空間に見出せない確率は増加し続ける。図3下段に未婚単身男女、高齢者の夫婦と単身者を近隣の多数派として描き、「新たなステージ」超少子化+子育ての社会化」と記す理由である。それは、同時代を生きた大人の男女が乳児期の親子を支える確率の低さを示す。育児不安解消や子育て支援の事業化、児童虐待防止の拡充が要請され、保育園・認定子ども園増設が自治体行政の課題（子育ての社会化+三歳からの幼児教育の制度化）になる社会的背景だが、希望が見えないわけではない。

女性の年齢別出生数割合の推移を示す図5を見てほしい。一九五〇年から二〇一九年への変化を見ると、二十〜二十四歳は二位から四位、二十五〜二十九歳は一位から二位、三十〜三十四歳は三位から一位、三十五〜三十九歳は四位から三位。二〇一九年生まれの子どもの母の六割が三十歳代、四十歳代を加えると65.9%になる。その子が小学校入学時に母はアラフォー、中学進学時にアラフィフと担任より年上の可能性大である。

もう一つ紹介しよう。末子の母の仕事の推移を示す図6である。二〇〇四年から二〇一九年への変化では正規職は16.9%が26.2%に、非正規職は26.2%が37.8%に増加。「その他」

8.5%を含め「仕事あり」は72.5%。担任よりも年上の母親の増加に加えて、働く母親が七割を超えることがなぜ希望なのか。むしろクレーマー拡大の社会的背景とみなす論も少なくない。だがそれは間違い。子どもの現実を構成する最も大きな力をもつ学校の変化から問い直そう。

四 生きる場と教える場が求める子どもの姿に齟齬が！

ゴールが見えない出生数の減少を所与とする現実を生を得た子どもたち。その自己形成に深く関わる学校の今を問う手掛りとして、図1から出生数、二〇二〇年学校基本調査から児童生徒数と一学級当りの児童生徒数、拙稿の教師ドラマベスト10論から選んだ放送時期推移を三層重ねた図7を用意した。

まず一層と二層の関係に注目を。児童数では、一九四九年二七〇万人出生の団塊の在学時ピークが一九五八年一、三四九万人、一九六〇年一六六万人出生の少産ボトムは一九六八年九三八万人、一九七三年二〇九万人出生のジュニアピークは一九八一年一、九二二万人と出生数に応じて児童生徒数は増減する。一学級当りはどうか。団塊は44.3人と多いが、少産とジュニアは33.4人と33.7人で差がない。

生徒数でも一九六二年団塊在学時ピーク七三三万人、少産ボトム一九七二年四六九万人、ジュニアピーク一九八六年六一一万人と出生数に比例する。一学級当りも、団塊45.7人↓少産

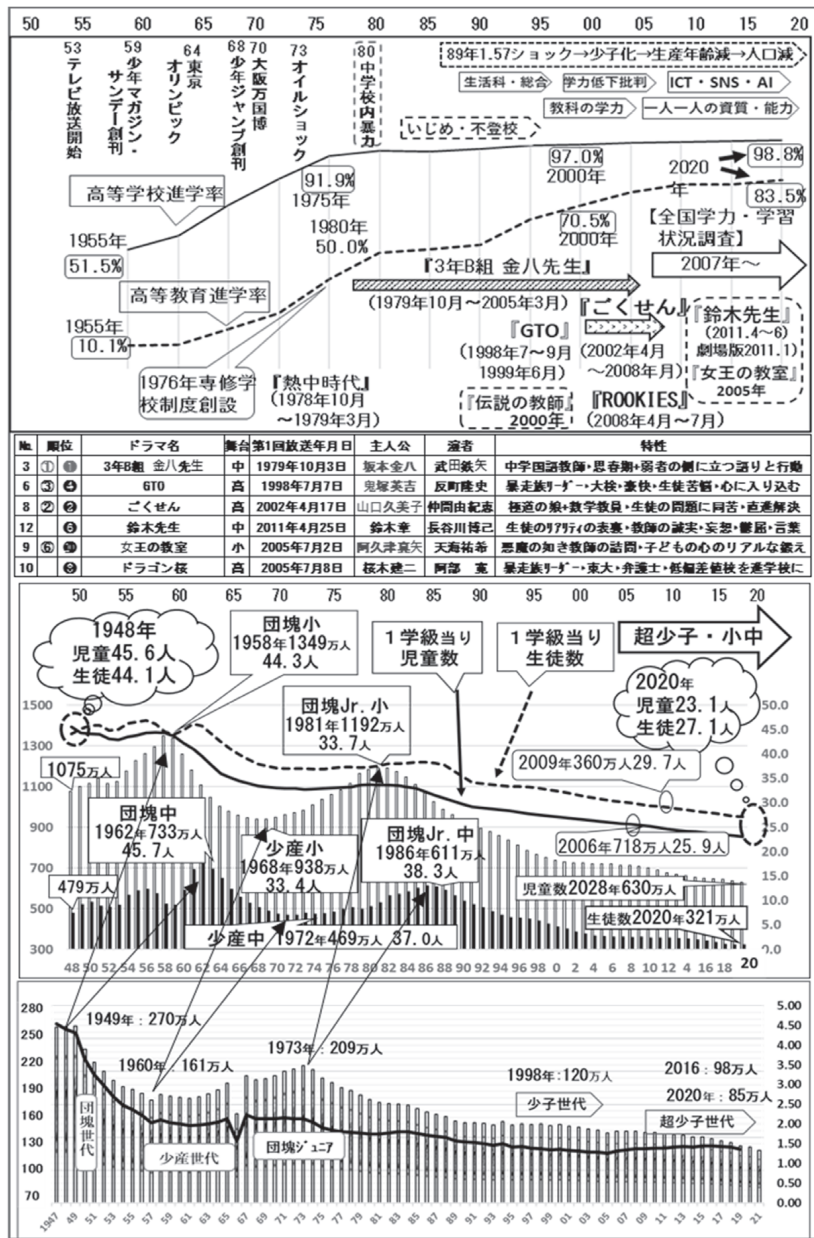


図7 出生率・出生数、児童生徒在学数・一学級当りの児童・生徒数、高校・高等教育機関進学率の推移と教師ドラマベストテンから選んだ放送期間と教育事象一覧

37・0人↓ジュニア38・3人と同傾向。だが、最新データの二〇二〇年では、児童数六三〇万人、生徒数三二一万人、一学級当り23・1人と27・1人になり、ジュニアとの差は小さくない。

その特性を知るために、一九八一年ジュニア（児童数と一学級当たり）を100とする指数値（百分比）を求めた結果、二〇二〇年児童数は半減の52・8％に対し、一学級当りは68・5％で15・7ポイントの差。同様の方法で、学校基本調査からデータを得て、小学校数と学級数の百分比を求めると、二〇二〇年度の学校数は78・1％、学級数は77・1％と、児童数との対比で減少幅は約25ポイント抑えられている。（データは末尾参照）

児童数が半減しても、学校数と学級数は八割弱に抑えられたのは、自治体教育行政の労苦と評価すべきか。それとも社会の変化に即応できない学校の問題点とみるべきか。その判断のために高視聴率を獲得したドラマの教師と放送時に重なる教育事象の推移を並置した三層から子どもの声を聞いてみよう。

五 金八先生の虚実と強いられた現実からの飛翔を

まず折れ線の高校進学率を見ると、一九七五年に90％を超えた後も上昇が続く。他方、四大、短大、専門を合わせた高等教育進学率は一九七八年50％達成後十年近く停滞する。この時期に金八先生こと武田鉄矢は独特の語りで高視聴率を得た。

その後、高等教育進学率は一九八七年51・0％に復帰し、二

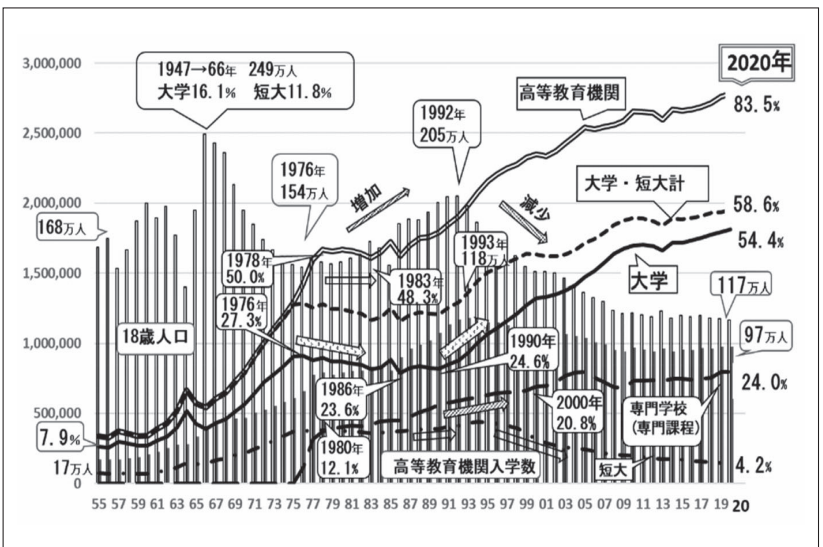


図8 「18歳人口、高等教育機関入学者数と進学率、大学・短大計、大学、短大、専門学校の進学率の推移」

〇〇〇年70・5％を経て二〇二〇年83・6％に向けて再び上昇期に入る。二〇〇〇年をまたぐこの時期に、「GTO」から「ごくせん」を経て「伝説の教師」「ドラゴン桜」が高視聴率を獲得する。その理由は、世紀を超えて顕在化する少子化とリンクする進学率再上昇期に、銘柄大進学コースを上位、無試験入学可能コースを下位に振り分ける装置と化した学校に同一化できない中高校生の日常の鬱積を解き放つ、愉快で理不尽なりアリティの開示と理解する。

それに対し二〇〇七年全国学力・学習状況調査以降の中学が舞台の「鈴木先生」には、受験エリートは今と未来のリアルが問われる。先行する都市部小学生の親の反感を喚起した「女王の教室」も含めて、進学可能性の尺度とリンクする成績以外の自己認定に戸惑う小中高生の心に挑む教師像の誕生の鼓動を聞き取りたい。その予兆として、金八先生の語りを求めた高等教育進学率停滞期のカラクリを開示しよう。

図8「18歳人口、高等教育機関入学者数と進学率、大学・短大計、大学、短大、専門学校の進学率の推移」を見てほしい。分母の十八才人口は一九七六年一五四万人から一九九二年二〇五万人に増加するが、大学進学率は一九七六年27・3％から一九八六年23・6％に低下する。他方、一九七六年度に制度開設の専門学校進学率は二〇〇〇年20・8％に上昇する。団塊ジュニアによる十八才人口急増の受け皿に新設専門学校が活用され

るが、それは下位側に仕切られた選択肢と受け取られ、上位層への移動が目的の受験圧力は旧来の大学の難関度を上昇させた。十八才人口の一九七六年一五四万人から一九九七年二〇五万への増加に、高校は九割以上を維持する増設で応じた。他方、高等教育は専門学校という別の器を準備した。しかし、知的能力の一元的尺度による選別に代わる選択基準の多元化には進めなかった。その結果、四年制大学、短期大学、専門学校それぞれ細分化された合格点数に適合する高校への配分（トラッキング）が中学生全てに強いられた。大都市では、中学入試に未来を重ねる小学生も参加する。この社会（選別）過程は、優れた少数の選別と多数のレベルアップではなく、多数の選り分けと劣る少数の排除を高校と中学の教員に求めることになる。人間のランクを決めるかの如きフィクション（虚構）を伴って、「15の春」は人生のランクの宣告季節（虚構）に変わる。

ここで金八先生の出番だが、実はより困難な現実が待つ。『教科書（知識）』の『理解（記憶）』と『問題を解く速さ（操作の時間）』を競う『学力（記憶力×操作力×時間）』の育成（虚）が、教員という職の資格（実態）であること。「腐ったミカンの方程式」（虚？）で排除されようとする問題行動（実？）に寄り添い、「たとえ世の中がどうであれ、われわれ教師が生徒を信じなかつたら、教師は何のために存在するのですか。言ってください！ お願いします！」（虚実皮膜）と叫ぶ金八

先生（虚）。その言葉と行動（実）、心情と判断（実）に共感する視聴者（中高生）は多かったが、学校現場を担う教員に違和感（実）が生じたことも事実である（実）。

だが他方で、私の経験の世界（実）では、金八先生をモデル（虚）に教職を選ぶ学生（実）は少なくなかった。反町隆史の「GTO」鬼塚（虚）や仲間由紀恵の「ごくせん」ヤンクミ（虚）に、長髪坂本先生に化した武田鉄矢の語り（実）が溶け込んでいないか。端正な長谷川博己の「鈴木先生」（虚）、正反對を装う天海祐希の「女王の教室」阿久津真矢（虚）こそ、金八先生の再来（実）と私は評価する。

もちろん、メディアが創る教師像は演技者の魅力と不可分（虚）で、その行動は教員免許と採用条件を逸脱する（虚）。武田鉄矢の叫びも含めて、リアルな学校教員の職場では発揮できない教師力（虚実皮膜）であろう。だが、少子時代の今と未来を生きた子どもたちは、学校と教師が常識とする世界とは異なる道を、自分の意志と選択と個性と能力を駆使して歩まなければならない。受験学力とは別次元で、誰もが、差異を優劣や格差の尺度ではなく、個性や適正の領域として等価に置き、一人一人異なる今と未来の自己像の固有性・個性・多様性を尺度にすることを心身に刻む（アイデンティファイ）ことを求め（られ）る。そのような日常を生きる（ねばならない）のが超少子世代であることを確認しておきたい。

六 未来が強い現実には悼さすために

三節末尾で、年長で働く保護者、特に職に就く母親こそ、子どもにとって希望の現実と記した。その理由を二つ指摘し本稿の結語としたい。その一つは、子どもの未来の現実への備え（知情意のパッケージ）は学校ではなく卒業後に担う社会にあるからである。その二つは、逆説的だが、母の支えからの離脱が自分の未来を切り開くパスポートだからである。

まず前者だが、少子化による超高齢化と労働力不足の現実を直截に描く図9と図10から理解してほしい。就業者人口（黒）と総人口（白）を五歳単位（棒グラフ）に重ねた図9では、白（人口の山）の山は二つだが、黒（働く人）の山が一つであることに注目してほしい。この白と黒の面積の差（労働力不足）の大きさが、人口減少下の日本社会が対峙しなければならない最重要課題である。しかし、その課題に立ち向かう条件となる男女、国籍、年齢の別なく、障碍を個性とみなし、多種多様な人が、学び、働き、支えあう情（感）と意（思）を加えた知と徳と体の形成の保障は、残念ながら現今の公立学校では難しい。その証左（エビデンス）がこれまでの節で確認した、個別・個性化した子どもたちの現実。に「応じることが困難な、学校と教室と教師の現実」である。

他方、図10は、一九七五年（団塊ジュニア誕生期）を起点（100）

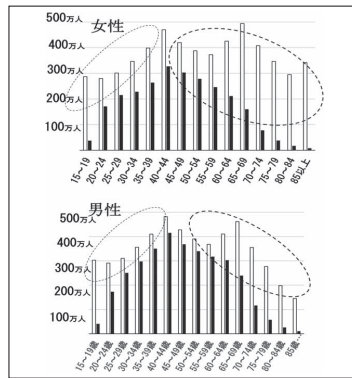


図9 年齢（5歳階級）別の総人口と就業者人口 2015年国勢調査

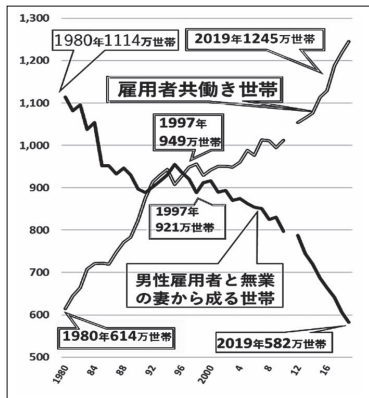


図11 共働き世帯数の推移 1980～2019

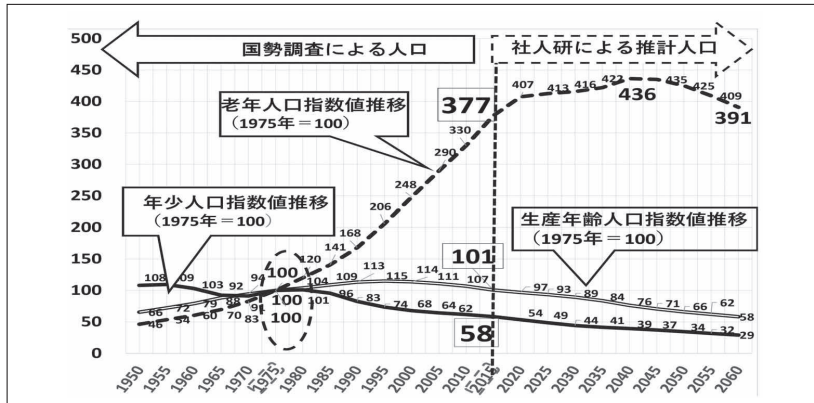


図10 年齢3区分別指数値（1975年＝100）推移 1950-2015年（実数）2020-2065年（2017年推計）

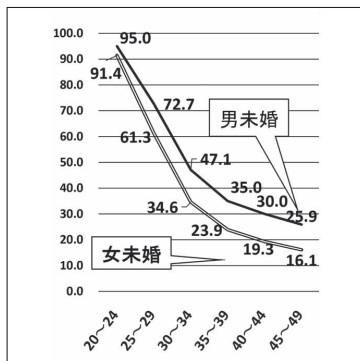


図12 性、年齢（5歳階級）、配偶関係別人口：2015年

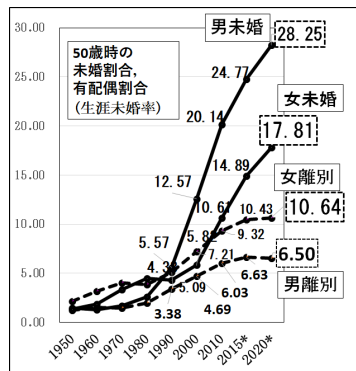


図13 性別、50歳時の未婚割合、有配偶割合、死別割合および離別割合：1920～2020年

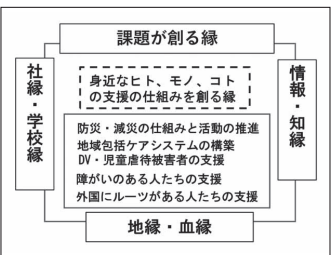


図14「生きる場」を創る「縁」の相関図

表2 「生きる場」を結ぶ4種の縁の特性

中心産業	関係の契機	人間・集団との関係の特性
1次産業 中心社会	血縁と地縁	同質・身分・伝統を前提とした公私未分化の非選択的な人間関係
2次産業 中心社会	学校や職業 による値縁	同質・競争・平等・競争・利害を前提に 集団への実質上非選択的な帰属関係
3次産業 中心社会	情報・知縁	選択の契機を介在させた部分的人間 関係(横並び階層化or棲分or共生)
☆6次産業 化社会	課題に応じ た支援・ケ アを創る縁	人口減少下の生活空間に生じる課題 に応じて創る“ケアと相互支援”の “仕組と人の間(あいだ)”



図15 保護者の背中に学ぶ授業改善モデル図

として、二〇一五年国勢調査による推計値を活用し、三種（年少、生産年齢、老年）の人口の推移を指数値（百分比）で示すことを試みた。①二〇六〇年にむけて上昇する老年人口上昇角度の高さ、②低下する生産年齢人口や年少人口との乖離の大きさ、③老年人口の山頂が平らになる年（二〇二五年）と期間に注目してほしい。

最大の人口コーホート（二〇四七～四九年誕生）の団塊が七十五歳以上の後期高齢期に入るまでに残された時間は四年。しかもそのジュニア（一つになった働く人の山の頂）もまた、十年後には退職期に入る。その後の高齢期への時間は、団塊が九十歳代に移行する時期と重なる。この巨大な高齢層を血縁や地縁とは関わりなく、しかも長期間、税と保険と職によって支え続ける役割が、山頂のない坂だけになった労働力人口の当事者である少子と超少子の世代に課せられる。

この課題への備えは、銘柄大学進学優先の選抜（学校教育）システムでは対処困難とみなさざるを得ない。その理由が二つの理由につながる。「共働き」と「無業の妻」の推移（図11）から、図6での母の就労が、一九九〇年代半ばから積みあげられた妻の就労の社会的基盤（家族と就労構造の変化）に支えられていることが理解されよう。また、男女別の年齢（五歳階級）別配偶関係別割合（図12）と五十歳時の未婚率と離婚率（図13）から、男性の生涯未婚率の高さ、女性の未婚率

の低さと離婚率の高さを確認してほしい。ともに、既婚、未婚、離婚に関わらず、大多数の女性が職に就く社会であることを、まさに直截に示すデータと理解する。それは、母もまた「子どもの未来の現実への備え（知情意のパッケージ）」を蓄えた社会に生きる人であることを意味する。いやより正確には、家事育児から逃げる父（男）にもまして、日常生活を支える多種多様な人の知と情と意に出会うことができるはず。少子化の淵源を辿る本稿での考察から、図12の数値は、学校が望む母（家事育児専業）の教育力とリンクする受験学力への依存は、娘と息子が創る新たな家族の準備を妨げることが指摘せざるをえない。逆に、職に就く母の背中から、入試準備が求める知識と技能とは異なるリアルな生活を支えるエッセンシャルワークが見えてくる。

表2を見てほしい。一九九〇年代（生活科誕生期）に、様々な「生きる場」で交わされる人と人との「縁」の特性を産業の興廃との関係で整理し、三次産業拡大が「人の結び目」縁を「地と血」や「学と職」から「情報」に変化させることを示す表を考案した。だが近年の人口減少の進行が「生きる場」にもたらす新たな課題の解決には、地と血、学と職、情報の三種を「相互支援の縁」で「結び直す」必要性を痛感し、支え合う仕組の核となる「ケア創り縁」を四種目に加えた。

さらに四種の縁と解決すべき課題との関係をモデル図にし

たのが図14である。本誌読者なら、この例示した課題五種は新学習指導要領が説く教科横断による資質・能力育成の舞台となる現代的諸課題であることが理解されよう。加えて、上記の四種の縁を結ぶ過程は、新学習指導要領のカリキュラム・マネジメントと地域の実態把握の重要性の記述に読み替えられよう。そして、この協働作業を担うのが保護者であり、その姿を授業改善の手掛かりとともに描いたのが図15である。

保護者の背中に教える職場の日々が現代的課題に対峙する資質・能力育成の現場モデル、課題解決に奮闘する保護者はナビ能力保持者である。この二つを活かす教科等の授業づくりの日常化の過程に、学力の資質・能力への転換の契機を組み込む「学びの地図」の作成が、カリキュラム・マネジメントの役割である。今と未来の「生きる場」に、四種の縁の結び目を創ることができる資質・能力としての「生きる力」を培う学習の方法と内容の編成作業である。さらに同時にそれは、実践モデル提供とナビ役を介して、子どもたちの保護者が未来への課題解決の方法を学ぶ設計図の作成過程である。

知的能力の高さでは測れない、命と生活を支える営みを学び取る人の縁が自らの人生を拓き開くカギであること。そのエビデンスとして、日常を共にする多種多様な人の結び目となる学びの地図を母（父も）の背中が教えてくれる。そしてそれだからこそ、父母の背からの卒業が自立への第一歩にな

る。パスポートと記した理由である。

以上の私見の提示に対する責任として、本稿で用いた視座の土台を述べておきたい。それは初期社会科への批判に抗するために提起された、上田薫先生の知識の二重の相対性と馬場四郎先生の学校と生活の二重適応批判である。そして、本稿での学校の現状への疑問の提示は、上田先生の志を継承される初志の会の先生方が積み重ねて来られた実践の蓄積に学ぶことで得た心ある教師への敬意と信頼があることを記して末尾とさせていただきます。

◆資料出所

- 図1…二〇一九年 人口動態統計（確定数）の概況（厚生労働省）
 二〇二〇年 人口動態月報年計（概数）（厚生労働省）参照
 図2、3、6…二〇一九年 国民生活基礎調査（厚生労働省）
 図5…国立社会保障人口問題研究所 人口統計資料集二〇二二
 版より馬居作成 データの出所『人口動態統計』調査
 図4、表1…図1と同一
 図7…一層 図1と同一
 二層 二〇二〇年 学校基本調査（文部科学省）
 三層 馬居政幸「テレビドラマが描く教師像の変遷にみる学校教育の虚実」『新訂版 人口減少時代の家

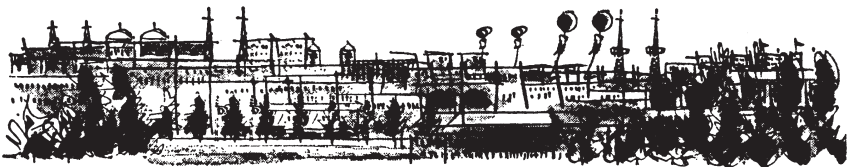
族・学校・地域・社会へ生涯にわたる学びと教える
 の新たな可能性を求めて』馬居政幸・角替弘規共
 編著 NSK出版 二〇二〇年一月

- 図8…二〇二〇年 学校基本調査（文部科学省）
 図9、10、12、13…国立社会保障人口問題研究所 人口統計資
 料集二〇二二版より馬居作成 データの出所は国勢調査
 図11…二〇二〇年版 男女共同参画白書 1―特11図より
 図14、表1…馬居作成 図7の馬居・角替共編著参照
 図15…イラスト 長野 亨

◆文部科学省学校基本調査年次統計より

小学校	学校数
	一九八一年 二万五、〇〇五校
	二〇二〇年 一万九、五二五校
学級数	
	一九八一年 三万五、〇七〇学級
	二〇二〇年 二万三、一七七学級

（静岡・静岡大学名誉教授）



子どもの風景

気になるN君がくれた気付き……………中野 富雄 (三)

特集 子どもの現在

子どもの現実

— 超少子社会を生きる男女の自立への道を拓き開くために —

……………馬居 政幸 (四)

青少年教育施設から見える子ども

— 遊びを通して見える子どもと大人のかかわりから —

……………杉本 守 (七)

コロナ禍における放課後学習支援・居場所づくり活動の再構築

— きたく部の取り組みから —……………清水 良彦 (三三)

理解することの空間的アプローチ

……………池田 竜介 (二六)

学校再開直後の子どもと教師の授業研究

……………小林 宏己 (三〇)

社会科が目指すものとはなににか

— 倫理学的視点から — (上)……………田上 良江 (三四)

問題解決学習 — 子ども・教師・学校 — 【第9回】

つながりの中で「個」は育つ

— つながり方の指導・支援について —

……………藤井 千春 (三八)

問題解決学習から「しみじみとする授業」へ(五) 最終回

— カルテ再々考(5) 承前・終 —……………溜池 善裕 (四四)

〈この子〉の問いに拠る実践 8

— 単元の底流にある問題と授業中の子どもからの問題提起 —

……………堀 智晴 (五四)

職員室の風景

前例にとらわれない取組……………橋本 顕彦 (五八)

わたしも一言

実践者の十二の言葉に学ぶ

— 自己成長のカギ —……………米川 佳伸 (六〇)

授業研究における授業記録の問題……………田上 良江 (六三)

コロナ禍「奪われた日常」に思う私の失敗

— 子どもの育ちとは何か、「話合い」とは何か —

……………中原 功博 (六五)

時評

関与・対処の適不適……………中村 亨 (六七)

研究部だより

第六四回全国研究会 参加申し込み方法……………柴田 好章 (六九)

『考える子ども』編集・投稿規程……………(七〇)

編集後記



年の全国研究会は、課題別分科会とシンポジウムで構成されることになりました。学年別分科会がないので、全国研究会関係のものは八月号にまとめ、七月号は通常編成です。オンライン集会在苦手という方がおられるかもしれませんが、これもひとつの問題解決の形です。お誘い合わせの上、全国研究会にご参加下さい。

特集「子どもの現在」は集会テーマの基底につながっています。現在の子どもの状況を読み取っていただければ幸いです。学校の外から、会の外からの視点が欲しいということで、馬居政幸先生と杉本守先生のお二人に執筆をお願いしました。馬居先生には教育社会学の視点から新たに図表を書き起こされ、データによって子どもの現実を論じて頂きました。杉本先生は学校の限界を感じて教育学部から今の道に進まれた方です。お二人に感謝するとともに、特集を執筆して下さいました清水先生、池田先生、小林先生に御礼申し上げます。

九月号から市川則文先生(三重大学教職大学院)の連載が始まります。十一月号特集テーマは「GIGAスクール時代の教育実践」(一〇月一五日メ切)。初志の会の立場からはどう見えるのか。特集への投稿もお待ちしております。

(松)

原稿の送り先

〒三八〇―八五四四
長野市西長野六―ロ 信州大学教育学部
松本康研究室「考える子ども」編集部
TEL & FAX 〇二六―二三八―四〇八一
Eメール k-kodomo@s-syoshi.com

二〇二二年(令和三年)七月一日 印刷
二〇二二年(令和三年)七月五日 発行

発行人 社会科の初志をつらぬく会

発行所 社会的 会長 的 場 正 美

(事務局) 千五七三―二一八二

大阪府枚方市御殿山町一―二―二二

水田辰男方

FAX (〇七二) 八四七―一六一―

H P http://www.s-syoshi.com

Eメール syoshi-aa@s-syoshi.com

郵便振替番号 〇〇一―二〇二―二二五二一六一

印刷所 東大和市新堀一―一四三五―二九
有限会社 サンプロセス

考える子ども

2021. 7月

特集 子どもの現在

考
え
る
子
ど
も

子
ど
も
の
現
在

二〇二一年七月

四〇七号



No. 407

社会科の初志をつらぬく会
個を育てる教師のつどい